

## 令和7年産一番茶の生産に向けて

### 1 防霜対策

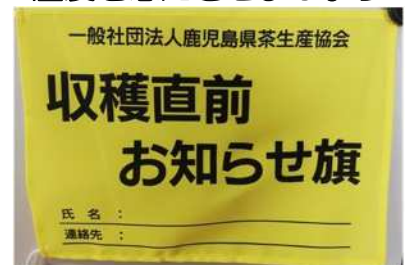
2月下旬からは徐々に平均気温が上昇し、茶樹の休眠も終わり、一番茶となる芽の耐凍性も低下していきます。耐凍性は2月の中旬から急激に低下しますので、晩霜等の急な寒さに対する対応が必要になります。特に、気象庁の最低気温を参考に耐凍性に応じた防霜施設稼働の設定をしてください。

また同時に、防霜ファン、スプリンクラーの点検・整備をすすめ、実稼働する3月上旬までには、万全の体制で対応出来るようにしてください。

なお、感知するセンサー場所は、ほ場の中で冷える場所に設置してください。併せて、スプリンクラー防霜では、周辺へ水の飛び散りがないように注意しましょう!!



センサーは板に載せて  
温度を感知させましょう



お知らせ旗で飛散防止対策



摘採計画で適期摘採を!!

### 2 施肥, 防除

施肥は、茶園管理暦を活用し、管理遅れのないようにしてください。有機栽培による管理をされている場合も同様です。

また防除は、作業前に風向、風速などをも確認して作業を進めましょう。さらに茶生産の皆様は、摘採前になったほ場に「お知らせ旗」(黄色旗)を立てて周辺耕作者へ摘採予定を周知しましょう。

### 3 摘採計画, 被覆計画

例年の摘採実績に基づき、今年度の摘採計画を作成しましょう。特に、製造する茶種が異なると被覆期間も異なりますので注意が必要です。3月~4月の気温上昇の状況により、新芽の生育は大きく変化します。気象庁等の週間予報などを活用しましょう。

# サツマイモ基腐病対策（育苗期の対策）

サツマイモ基腐病対策として、採苗方法と苗確保の対策をご紹介します。

## 1 採苗方法と苗消毒

- (1) 苗は、地面から5cm程度離れた位置で採苗すると、感染リスクが低くなります。
- (2) 苗消毒は、ほ場での初期生育期に発病抑制効果が高いので必ず行いましょう。
- (3) 苗消毒は必ず採苗当日に行い、消毒液は使用日ごとに毎回新しいものを使いましょう。
- (4) 苗全体(葉の先まで)を薬液に30分浸けましょう。

採苗 → 当日 → 苗消毒 → 苗の取置き

※苗全体を薬液に30分漬ける

- 採苗時は地際から5cm以上離れた位置で採苗し、苗消毒を行う。
- 採苗で使用するハサミは、消毒して使用する。
- 消毒液は使用日ごとに毎回調整する。

## 2 発病株は除去

- (1) 育苗中に発病や症状を確認したら直ちに種いもごと抜き取り、ほ場外に持ち出して処分しましょう。
- (2) 萌芽せずに腐敗した種芋も掘り取り、同様に処分しましょう。

## ○ 植付ほ場での薬剤散布を確認

薬剤の散布例				
土壌処理剤	苗消毒	1回目	2回目	3回目
植付前	植付前	植付から35日頃	1回目から14日後	2回目から14日後
フロンサイドSC フロンサイド粉剤 を使ったら	ベンレート水和剤 による苗消毒	アミスター20 フロアブル 100L/10a	銅剤 200L/10a	トリフミン 水和剤 200L/10a
フリントフロアブル25 を使ったら	ベンレート水和剤 による苗消毒	トリフミン 水和剤 200L/10a	トリフミン 水和剤 200L/10a	銅剤 200L/10a



←より詳しい情報はQRコードをチェック

# 麦の赤かび病対策について

赤かび病は、開花時期の感染拡大を抑えるため、出穂期以降の薬剤散布が重要です。

## 1 赤かび病とは

- (1) 本病は、フザリウム属のかび(糸状菌)による病気で、麦類の穂に発生し、**開花期～乳熟期の降雨**や、気温が20～27℃のときに特に感染しやすくなります。
- (2) 本病は人畜に有害な物質(かび毒)を産生することがあり、**防除の徹底が必要**です。
- (3) **出穂期以降の薬剤散布**が重要です。



<麦類の赤かび病：農研機構・HPより引用>

## 2 薬剤例

トップジンM水和剤	出穂期以降	チルト乳剤25
1000倍で散布, <b>2回以内(小麦)</b> 1回以内(裸麦) 100g/100L・10a		1000倍で散布, <b>3回以内(小麦)</b> 1回以内(裸麦) 100ml/100L・10a

出穂期以降の薬剤散布回数は薬剤によって異なります

麦類の単収向上と品質向上に努めましょう



# 黒系ぶどうの着色向上技術について

近年、着色期の夜温が高いことによる、黒系ぶどうの着色不良が問題となる中、令和4年10月に着色促進効果のある天然物由来アブシシン酸含有の植物成長調整剤が登録されました。今回、令和6年度の実証結果を踏まえ、効果的な使用方法や留意点等について紹介します。

- 1 商品名  
アブサップ液剤（以下、S-ABA）
- 2 効果の仕組み  
アブシシン酸（植物ホルモンの一種）が色素成分「アントシアニン」の生成を促し着色が向上。
- 3 使用方法  
着色始期～着色開始2週間後にハンドスプレー又は電動スプレーガンで果房にムラなく散布（100倍、2～10ml/1果房）する。



写真1 処理時の着色状況

- 4 結果  
(1) S-ABAを100倍で散布ムラのないように散布することにより、処理区は着色が向上した（写真2）。  
(2) 処理時期は、着色始期から着色開始10日程度（写真1）であったが、薬剤の登録使用時期範囲内であれば収穫期における果実の着色促進効果に差はなかった。

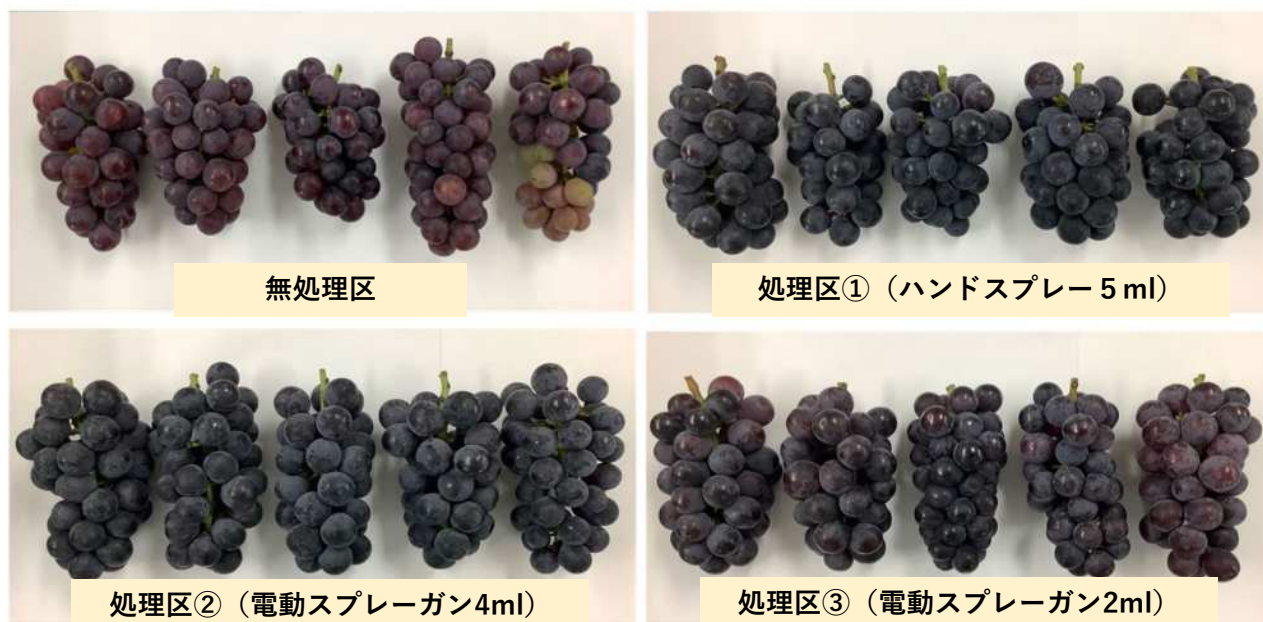


写真2 各区の収穫期の着色状況

- 5 留意点  
(1) S-ABA処理による品質（糖度や酒石酸）向上は認められないので、品質を必ず確認の上、収穫してください。  
(2) 薬液がつきすぎると果面の汚れや果粉溶脱の恐れがあるので、果房からノズルをやや離して、なるべく細かい霧状の散布を心がけてください。また、移行性がないので、ムラのないように果房全体に散布してください。

令和7年2月現在、S-ABAの登録は、使用できる品種が「巨峰」、「ピオーネ」となっています。今後、赤系品種での登録拡大が期待されています。登録拡大に係る情報が入り次第、お知らせします。

また、着色向上技術の基本は、適切な果房管理やビニール除去等です。まずは基本管理を励行し、S-ABA剤を効果的に使用することで高品質なぶどうづくりを心がけましょう！

# 根深ねぎ生産者の皆様へ（病害虫情報）

根深ねぎ栽培において、令和5年作（令和6年冬春期）に発生が多く見られ、今作の令和6年作（令和7年春期）においても発生が懸念される「ネギハモグリバエB系統」をご紹介します。

## 1 ネギハモグリバエB系統とは？

- ※発生適温：20～25℃
- ※主に春～秋にかけて見られます。増殖がすさまじく、複数の幼虫が葉を食い進み、やがて葉が真っ白になります。
- ※低温期も「さなぎ」の形態で土中越冬します。特に秋に発生したほ場では、春の発生に注意してください。



写真 ネギハモグリバエB系統

## 2 対策・・・苗定植時（スタート）から発生抑制

- ①定植時の粒剤：ミネクトデュオ粒剤(i28・i4A), ベリマークSC(i28), ダントツ粒剤(i4A)等
- ②発生初期を見逃さずに下記登録農薬を散布する。

### <登録農薬の一部>

アグリメック(i6),ダブルシューターSE(i5・iその他),ディアナSC(i5),グレースシア乳剤(i30),パダンSG水溶剤(i14),ダントツ水溶剤(i4A),アグロスリン乳剤(i3A),ベネビアOD(i28)等

病害虫に薬剤抵抗性を生じさせないため、上記農薬のラックコード（（ ）内の番号）を参照し、同じ番号の農薬の連用を避けるようにしましょう。

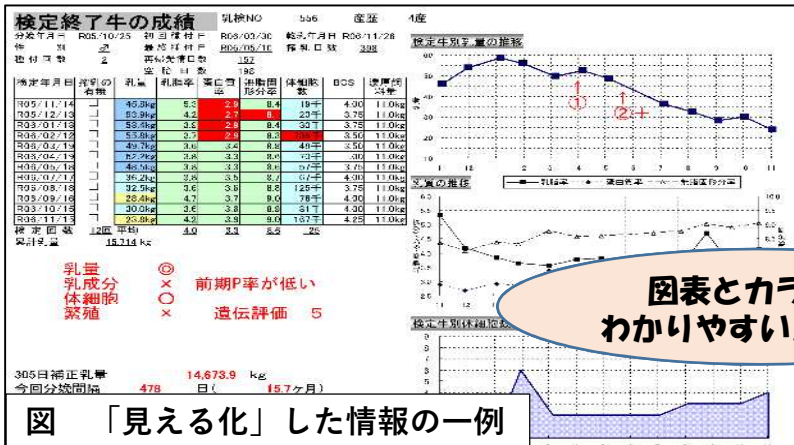
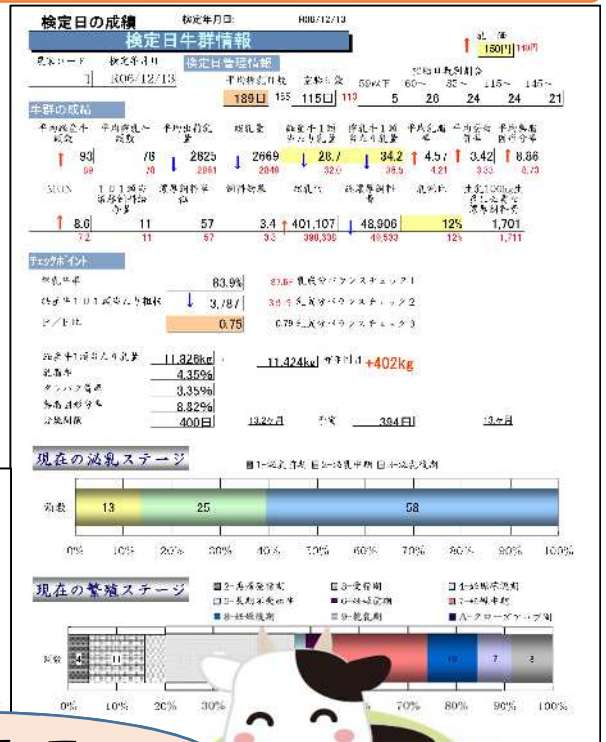
## 活動事例

# 牛群検定情報を「見える化」して、SNSでフィードバック！

酪農の業界では、毎月飼養している牛の乳量や乳成分の酪農情報、分娩や種付等の繁殖情報を記録し、家畜改良事業団で分析し、“おいしい牛乳”を生産するために活用する牛群検定を実施しています。

この情報は、インターネットを通じて情報提供されており、牛群改良、さらには経営改善に役立てることが可能となります。

当課では、昨年からの情報をより活用しやすいように「見える化」し、また、タイムリーに情報提供できるようSNS（LINE、メール）を使ってフィードバックする取組を行っています。



図表とカラーでわかりやすいんだモ～

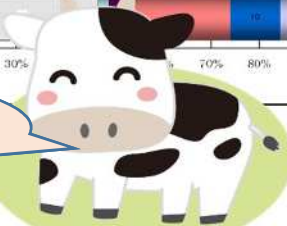


図 「見える化」した情報の一例